A Kidnapped Orphan と未来の Nabob

難　波　美和子

18世紀半ばはインドとイギリスの関係の転換期であったといわれる。東インド会社が交易から領土支配へと変質するきっかけとなった事件が、この時期に起こっているからである[1]。この転換期を同時代のイギリスはどのように捉えたのかを、文学的テキストから考察してみたい。18世紀半ばはイギリス文学史では「小説」の成立時期であり、同時代を写す表現手段として試みられたのである。ここで取り上げる *The Adventure of A Kidnapped Orphan* は、東インド会社という存在と彼らのインドにおける活動に対する同時代的な認識を「小説」というスタイルで問題化したものとみなせよう。では、テキストにおいて何が「問題」とされているのだろうか。

この物語は主人公がだまされて東インド行きの船に乗せられることが発端となり、彼が不運にもインドで死亡することが結末となっている。the Editor を名乗る書き手が読者に訴えることは、「無知な同国人を欺瞞によって奴隷状態に置くことの非人間性」であり、奴隷状態に置かれた人々を虐待する環境への非難である。主人公の悲劇を生む「強制徴募」が問題とされていることは間違いないが、後半のインドにおける主人公と他の登場人物との関係性には、東インド会社をめぐって人道主義以外の問題が書き手の中に意識されていることをうかがわせる。それは会社の縁故人事が引き起こす身分制度の撹乱である。この点で、主人公が参加するインドにおける戦争がどのように利用されているかを検証したい。

1．猫とニシンとインド

スコットランドの昔話に、「ニシンとねこを持ってインドへ行った男のこと」[2]という話がある。主人公の親とその友人はインドへ行って財産を築いた。父親の死後、若者は「ニシンを二ダースとねこを七匹」もってインドへ行き、大もうけをして帰国する。イギリスの人々にとってインドで財産を築くことに不可思議さが付きまとっていたことをここでもみることができるだろう。伝承である以上、この語りが成立した厳密な時期を確定することはで

きないが、インドと富は結びつきやすかったように見える。語り手が物語の時代をカロデンの戦い（1746年）の前においていることに注目したい。若者はインドの王様から連銭葦毛の名馬をもらう。若者と娘は二人で「インド屋敷」を去り、「こうして連銭葦毛の馬はスコットランドへむかい、皇子チャールズは、カロドンの戦いでそれに乗った」。二人はカロデンの戦いの神話的な時間の向こうに消えてしまう。しかし、インドの富がイングランドの社会に顕在化するのは、まさにこの時代からなのである。

2．孤児の運命

The Adventure of a Kidnapped Orphan は、Printed for M. Thrush 1747の奥付をもつ。しかし、Introduction では孤児の運命を語る the Editor が1758年にカルカッタに滞在したことを述べているほか、1747年以降とみなせる事件に主人公が関わっていることから、実際の出版の年代は特定できない。しかし、扱われている時期は1750年ごろから1557年ごろと理解され、それから大きく離れない時期に書かれたと思われる。奥付と内容との時間的な矛盾は後で述べるように、書き手もしくは出版者の意図的なものとみなす方が自然であろう。

著名なテキストではないので、以下に概要を述べておく。

主人公トーマス・ペイジ Thomas Page は良家の出身だが、早くに両親を喪い、妹と共に叔父に引き取られた。十分な教育を受けた後、法律を学ぶためにロンドンに住む知り合いのもとへ預けられた。慣れない大都会をぶらついている時に新兵周旋業者にだまされて監禁され、東インド会社の兵士として船に乗り込む契約を結ばざるを得なくなった[3]。ペイジはそのまま東インドへ向かう船に乗せられ、出帆した。船中では、新兵であるペイジは一等航海士のテスティ Testy とその仲間からさまざまな虐待を受けるが、友人となった見習い士官のマンリー Manly や船医助手のシュリンジ Syringe に保護され、熱帯地方での病気も何とか切り抜けた。船は喜望峰を越え、ジョハンナ島 the island of Joanna [4] を経由してボンベイに到着した。

ペイジは東インド会社の陸軍の兵士であるため、ボンベイでは船内で彼を保護してくれた友人たちと別れねばならなかった。船に乗り込んだときと同様に、新任地でも新しい上司や仲間からの虐待に苦しんだ。さらにこのとき身分詐称を暴いた上司ヴァンプ Vamp からは後々まで憎まれ、妨害を受けることになった。状況に絶望しながらも、運命に従い始めたペイジに同情を寄せてくれる者もいた。マドラスへ向かう途中、あるインド人の兵士が彼に親

切にしてくれたことで親しくなったが、インド人との友情は軍隊の秩序を乱すものとして非難され、罰せられてしまった。やがてフランスとの戦争やベンガル太守との戦争などでたびたび勇敢に戦ったペイジは隊長ワージィ Worthy から高く評価されて昇進と自由の機会を得るが、現地で強い影響力を持つヴァンプの度重なる妨害で適わなかった。そして長年の苦労で体を壊し、編者に「私の不運を公にして不正を訴えてほしい」と依頼して、カルカッタで亡くなった。彼の物語を公にするに先立って編者はペイジの叔父と妹を探したが、ともに死亡していた。

2．名前と性格

主人公トマス・ペイジは善良な若者である。1章で彼は裕福で立派な先祖を持つ家に生まれ、両親から知性と良心を与えられた、と紹介される。そして彼は善良で優れた若者に成長した。

> Trained under such examples, his mind was early formed to virtue and he imbibed such principles as do honour to human nature, and render the possessors the admiration of mankind. (p. 10)

そして同時に、the unsuspecting Youth (p. 15) とも呼ばれる存在でもある。すなわちペイジ Page とは姓であるよりも、「少年」を意味する語の通り、物語の内部における彼のあり方を表象する記号である。彼は無垢で欠点のない少年で、したがってだまされたり虐待を受けたりするが、一方で勇敢な兵士に変わり得る存在でもある。

同様に、上に挙げたような登場人物の名称はその「キャラクター」によって規定されている。東インドへの輸送船の中でペイジの最初の友人となるのがマンリーであって、ペイジの保護者として彼を「男らしいもの」とみなすのであろう。名前は、'As this person, whom we shall call Manly, . . . ' (p. 27) と紹介がされるように、それは実名として扱われてはいないのである。「名前」が与えられている登場人物は、ペイジ以外はしばしば「彼を・・・と呼ぼう」という形式が取られている。一等航海士は最初の登場場面で腹を立て、マンリーにいやがらせをすることから、テスティ（＝怒りっぽい）という名で呼ばれるのである (p. 33)。つまり、名前は機能を表し、寓意的な意味を持つ。それぞれの登場人物は総体的な人物像ではなく、テキスト内の機能としてのキャラクターを有するのである。

たとえば、船の中でマンリーと共にペイジに同情を示す二等航海士が、「彼の気質と人格のゆえにハーティ（＝親切な）と呼」（p.49）ばれることや、後に兵士としてのペイジの能力を評価する士官がワージィ（立派な人）であり、信頼するに足る友人がトラスティ（＝信頼できる人）であることなどはわかりやすい。あるいは、傲慢で空威張りの船長がブラスター（＝強風）であり、身分詐称をペイジに暴かれる士官はヴァンプ（＝でっちあげ）である。船医助手の若者に与えられたシュリンジ（＝注射器／スポイト）という名は彼の医師としての仕事を示すと考えられる。これらの登場人物は、ペイジの「友人」か「敵」という構図を反映しており、彼らの人物描写にこのテキストの意図が示されていると思われる。

一方、ペイジとあまり、もしくはほとんど関わりがないが、いかにも名前らしい名前が与えられている人物もいる。船医オフラティ O'Flarty は病気のペイジを診察しない医師であるが、アイルランド人であることを明示する名前である。インドで最初にペイジが配属される部隊の隊長マックトライフル Mac-Trifle は「東洋に非常な関心を持っている（p.126）」が、trifle（＝つまらない）という名のとおり、ペイジとのかかわりの中ではあまり重要な人物ではない。テスティと対立したマンリーを鞭打ちする役の水兵カロース Callous（＝慈悲のない）にはベンジャミンというファースト・ネームがあるが、それほど重要な人物ではない。ファースト・ネームを持つのはペイジ以外では、敵対者であるウォルター・ヴァンプと次に述べる郷士ピーター・シンプル Peter Simple Esq. とこのカロースだけである。シンプルは彼が亡くなったためにマックトライフルが昇進し、その後にヴァンプが任じられたという説明に名前だけ登場する。しかしこれらの人物の存在も、ペイジとの対比において意味が与えられていると思われる。物語の内部での機能が明白な登場人物と比較することでそれぞれの意味が明らかになるだろう。

3.「友人」と「敵」

上に述べたように、登場人物はペイジにとっての「友人」と「加害者」そして周縁的な人物に分けられる。ただし、ペイジの明らかな敵対者として振舞う個人はヴァンプだけである。一方、友人としては船上でのマンリーとシュリンジ、戦時のワージィとトラスティがおり、そのほかは直接はかかわりを持たない周縁的な人々と位置づけられる。彼らが寓意的な人物であるとするならば、その設定を確認し相互に対比させることで、テキストが肯定していることと、批判していることが指摘できるだろう。

まず、マンリーとシュリンジはペイジと同様に十分な教育を受け、船上生活に適応してはいるが、荒っぽくも残酷でもない。マンリーは次のように紹介される。

> Mr. Manly had received a classical education, and had entered on academical studies, but being inflamed by his own passions and seduced by lewd companions,.... This course of life exhausted his fortune in the space of about four years,... he entered on board a privateer,... (p. 27)

つまり彼は知性も良心も能力もあるのだが、ペイジにはない欠点によって、現在の状況に自ら足を踏み込んだのである。彼は無垢ではないペイジであるといえる。一方シュリンジに欠けているものは財産と縁故である。

> Syringe was a young fellow of good education and much practice ; but having very little money, and as few friends, a dearth of business on shore had compelled him to incur some debts in town ; therefore to avoid the miseries of a goal, he had embraced the first opportunity of shipping himself,.... (p. 67)

逆にペイジには財産も法律家になるための縁故もあったのだが、新兵周旋業者の手にかかってそれは意味のないものになってしまった。

この二人と別れた後、特にヴァンプに苦しめられるペイジを慰めるのは、後で述べる「インド人兵士」であり、カルカッタの緊迫した状態でペイジの上官となるワージィとその後戦友となるトラスティである。

このトラスティはマンリーとシュリンジ以上にもう一人のペイジである。彼の死はペイジを絶望させる。彼らの違いはペイジが孤立しているのに対して、トラスティの方がおそらく周囲に対する目配りが行き届いていることだろう。

> As this person had shared the same fate with himself, received an education superior to the vulgar class, and possessed an exalted soul and elevated temper of mind, he could not fail of improving even the present melancholy occasion of joining in social converse,.... (p. 225

−226)

さらに確認される彼らの友情の誓いは、同じもの同士の結びつきを強調し、鏡に映ったもの同士が対話をしているように見える。

ペイジを支えるこれらの友人たちは基本的にペイジの分身であると考えられる。彼らは共通して善良さと教育を持っているが、いずれもそれぞれの職分で成功しているとは言いがたい。

一方ワージィは「ジェントルマン」呼ばれているので、ペイジと同じ階層に属すると認められ、東インド会社軍における地位も上層部とはいえないが、出身と能力に見合ったものとして扱われている。彼の会社への参加の理由は述べられないが、彼が現在の地位にあることは当然のことなので、説明の要がない。ワージィはペイジが成り得た可能性を示す。彼はまた同情を示すことのできる人物として描かれ、ペイジの身の上話（his melancholy tale）を聞いて泣き出して、以下のように申しでる。

> 'I sincerely pity your hard, your most extraordinary case, which is as affecting as it is peculiar, and needs but to be known to excite the sympathy of every compassionate bosom. You may comfort yourself with an assurance, that I me you shall find a friend, a patron and defender,.... ... and better fate will attend the residue of your days.... ' (pp.218−219)

この申し出がペイジにとって支えとなったことは確かだが、ワージィはヴァンプの妨害を取り除くことはできない。ワージィは会社軍での立場はヴァンプに近いが、出身とペイジとの関係からいってヴァンプの対立項と言える。彼らはペイジを巡って対抗しているが、どちらも優勢になることはできない。

ところで、周縁的な人物である船長ブラスターと船医オフラティは主筋から考えると不均衡なほど、その出自あるいは現在の地位に至る説明が述べられている。ブラスターは郷士 Esquire の称号があること、イングランド西部出身で東方貿易で財をなした叔父に従って船乗りとなり、やがて自分の船を手に入れた。しかし彼自身については、その名前同様、肯定的な評価は与えられていない。

> As he was sent to sea very early in life, and his attention wholly engrossed with maratime (sic.) affairs, he is a stranger to the world; and because through the interest of his uncle he has obtained preferment, vainly attributes that to merit which is the result of chance, and thinks contemptibly of every one in an inferior station. (p. 69)

東方貿易に関わった者の親族が同様に東方貿易に参加することは東インド会社の例を見ても珍しくないはずだが、その際の縁故関係が否定的な評価につながっていると見られる。ブラスター以上に、オフラティの立場は非難されるものとなっているのだが、次に見るように医師としての資格の問題だけではなく、アイルランド人であることが問題となっている。

> This despicable fellow [= doctor] was a native of Ireland, and had served his apprentieesnip (sic.) in an obscure village in the North, to a master, who had neither skill nor practice sufficient to afford him a competent knowledge of hi profession, but with that effrontery, which is the characteristic of his country. (p. 38)

オフラティの徒弟奉公の言及は、医師資格、特に外科医の資格が大学教育と結びつき、このような経験主義的な医療行為が「偽医者」として排除されていった時代的な背景を示すであろう。一方このアイルランド嫌いは書き手個人の認識によるものか、あるいは当時の東方貿易の文脈の中で理解すべきものであるかは本論では断言することができない。ところで彼がロンドンでの営業をあきらめて東洋へ行こうと船医の職を得るにあたっては、仲介者が存在した。職を世話した人物の名がフィルポット Philpot（＝酒好き？）である。この人物に名前がある理由は検討に値するだろう。

最後に、ヴァンプはなぜペイジを目の敵にし、彼の昇進や解放を邪魔しなければならないのか。彼はどの点でペイジと対比されるのだろうか。ボンベイに上陸したペイジの前に無慈悲な士官として登場するヴァンプは、実はペイジの知人であったのだが、彼が期待した親しみや同情を示してくれるどころか無視し、厳しく当たる。その理由はヴァンプがインドでは郷士すなわち「ジェントルマン階級」の人間として振舞っているのに、そのような出身ではないことをペイジが知っているからである。この偽装は当時においてはスキャンダルであり得たと思われる。しかもペイジは彼の偽装に腹を立てて、

その事実を公言してしまうことで、ヴァンプの怒りを買うのである。ヴァンプの圧力によってペイジは自分の発言を否定する文書を書くが、それは本気で否定するものではないように読める。

> 'Whereas I John[5] Page, . . . declare, that the said right hononourable (sic) gentleman Captain Walter Vamp Esq. was descended from mean parents, that his father was a thresher, and himself a plough-driver, to the great dishonour of the said honourable gentleman Walter Vamp Esq. and the disgrace of his ancient and honourable family; . . . I do hereby solemnly and publicly revoke what I falsely and maliciously asserted, begging pardon of his hounour for the offence I have committed, . . . to the said Captain Walter Vamp Esq. for the future, . . . '[6] (pp. 151－152)

ペイジにとっては、マンリーに訴える言葉にあるようにヴァンプは自分の父の家の使用人だったという認識があり、ふさわしい対応を相手に求めているが、ヴァンプにとってはそれはすでに過去のことであって、「彼は過去に関係なく、未来の行為に値する評価を受けるべき」(p. 150) なので、ペイジの記憶は迷惑なのである。しかしそれをヴァンプはペイジに理解させるのではなく、強制によって行ってしまう。さらにペイジにとって我慢できないことは、ヴァンプの現在の地位がイギリス本国にいる有力者の援助によっていることである。ヴァンプの姉妹が富裕な商人の目に留まり、彼女の徳を捨てて囲われ、その関係がヴァンプを東インド会社の評議会に声が届くものにしている。そして彼は彼女のもとで、「ジェントルマン」にふさわしい行動をまなび、「ジェントルマン」として振る舞い始めたのだと説明される。

ヴァンプの詐称がペイジによって強く否定されるように、ここでは、「過去ではなく、未来の行為」での評価は重視されていない。「能力に見合った昇進」が行われていないことが非難されるので、それ自体が否定されてはいないようだが、詐称が問題視されているため、身分制度の撹乱を非難する立場が前面に現れて来る。ヴァンプだけではなく、ブラスター、オフラティにも共通する、彼らに否定的な評価を与える要因は、「よい（古典的な）教育」の欠如、つまり経験的な知識しかないこと、縁故による不正な手段での地位の獲得が挙げられる。ペイジとその友人たちとは欠如しているもの、保持しているものが逆なのである。そして、オフラティとヴァンプは本来参加する

資格のない上位の社会に属しているとみなされる。

4．サメ

このような「不正な力」による社会の動きが書き手にとって批判の対象であることは、物語の前半の航海中の事件の中にも見ることができる。まず、船内の秩序が理性や思いやりという要素ではなく、テスティによる無慈悲で暴力的な方法で保持されている状態から、ペイジはホッブズを連想する。

> 'I have heard with honest indignation of the system that Hobbes lays down in his Leviathan, which intimate that mankind naturally prey on each other ; but the conduct of these maritime sabages convinces me, that human nature may be degraded beneath brutality ; . . .' (p. 65)

ペイジがテスティを「暴君」と表現するのは『リヴァイアサン』における力による社会を船の中に見ているからである。

その後、熱帯海域で、乗組員たちはサメ狩りをするが、サメの群れは力だけが支配する何もかも貪り食う怪物として、ペイジの目には映っている。しかし、シュリンジは彼に、この「海のサメ the shark-aquatic」よりも恐ろしい怪物として「陸のサメ the shark-terrestrial」の話をする（pp. 79－85)。三種類の「陸のサメ」には「政治的なサメ」、「商業的なサメ」と「偏在的なサメ」である。「政治的なサメ」とは社会全体を強欲に食いつぶす。一方、「商業的なサメ」はあらゆるものを独占し、飲みつくそうとする。

> 'The commercial shark is obnoxious to the general interest of trade, either by monopoly, forestalling, or underselling. Monopolies, though founded on charter, and supported by the all prevailing influence of influence of gold, are injurious to the public, ...' (p. 83)

このサメがイギリス東インド会社を指していることは確かであろう。最後の「偏在的なサメ」はどこにでもいて、弱者を食い物にする。ペイジを船に送り込んだ周旋業者や、テスティのような人物をさしていると思われる。したがって、シュリンジによって非難されているのは、重税を課しながら社会の福祉に配慮しない政府、東インド会社のような独占企業による商行為、そして社会のあちこちに巣くう悪である。ここでは、東インド会社に非難が向

けられていることに注目しよう。東インド会社という体制が、自由貿易という立場から批判の対象となっていると同時に、上述のように「縁故主義」や不公正で非人道的な待遇という点でも攻撃されているからである。ペイジという不幸な人物の運命によって社会の不正を訴えるというテキストは、むしろそれを行っている東インド会社を批判することに重点があると考えられる。

「商業的なサメ」としての東インド会社がどのような活動を行っているかは、テキストは十分に描写しない。つまり、ペイジが直面するインドは貿易の舞台としては描かれていない。むしろ、軍事的対決の舞台である。

5.「美しいインド」

ペイジはマンリーたちと別れた後、マドラスへ向かう船隊の中で、ラスカル（Lascar，インド人の兵士）と親しくなる。この兵士が悲しみに沈んでいるペイジを慰めてくれたのである。このことは彼に驚きを与えた。ペイジはインド人の兵士に、そしてインド人一般に自分と同じ人間性が認められると気づくのだ。むしろ彼は思いやりを期待していた「キリスト教徒」への失望の代わりに、共通する人間性がヨーロッパ人とインド人に存在するという発見を語る。しかしそれは、同僚たちに理解されることはなく、秩序をみだすものとみなされる。そしてその後、ペイジがこの兵士と個人的な交流を深めることが語られることはない。

ペイジはもともとインドへ望んできたわけではない。18世紀半ばにはインドは良家の子弟が出世のために向かう場所ではなかったと言われる。したがって、彼は最初から、インドへの期待を表明することはなかった。インドでの滞在の後、編者に語ることばとして、初めてペイジのインドに関する意見が述べられる（pp.210－214)。彼はインドと富とを結びつけるイメージを共有していなかったのかもしれない。インドに上陸して、「途方もない豊かさ」に驚嘆し、目を見張る。しかし、彼にとっては「世界の四分の一」を支配するヨーロッパ人の優位さに揺るぎはない。むしろ彼は貧富の差をはじめとするさまざまな欠点を発見していく。

> 'Now was I less astonished at the wide disparity between the rich and the poor, I these articles ; for while the former are attired in silk, attended by numbers of slaves, and pampered with every delicacy; the later, especially among the Gentoos, go almost naked, are the veriest drudges, and live upon the coarsest fare.' (pp.206－207)

貧しい人々が人間的に扱われないと気にしつつも、それを非難するよりも、豪華な装身具や、金持ちが利用する贅沢な輿（palanquin）を怠惰な生活態度の表れとしながら感嘆せざるを得ないようである。輿の魅力は贅沢さ、手の込んだ美しい装飾にある。ペイジは輿の運び手の負担の面からもこの慣習を非難しているが、程なくインド在住のイギリス人によって取り入れられ日常的な必需品となっているようだ[7]。それを予感させる、あるいはすでに兆候がみられた反映かもしれない。ペイジは輿を利用する身分ではなかったが、魅了され、場合によっては利用する資質を有するに違いない。

このように、ペイジが非難もこめて魅了された視点で語るのに対し、彼に答える「編者」は、インドをヨーロッパの指導の下に変革する必要性を表明する。彼が推進すべき法として挙げるものは一夫一婦制度の施行である（p. 212)。そうした介入的な意見の一方、編者はむしろインドにイギリス人が恒久的に支配することに反対する立場であるように見られる。それは人道的な立場ではなく、インドを含めた東洋諸国のあり方が気候的にも経済的にも彼らの道徳に合致しないからである。

> '... thence, in all probability, arises the indolent and slavish acquiescence of the Eastern nations in general, with that detestable form of government, Despotism, where neither the profusest fertility of soil, nor the Elysian temperature of the air in some parts, ... can attone (sic) for the want of that greatest of all, Liberty. ' (p. 213)

イギリス人が勤勉で自由な国民であるためにはこのような豊かな国から離れるべきだという。「イギリスとは穏やかな法の、最良の制度の下で、幸福な住民にとってインドのすべての宝石よりも価値のある生命と財産とが安全である故国（p. 213)」であって、そこから離れていることはできないとする。すなわち、インドから不正な略奪を行うよりも手を引くべきだという意見と同様に「インド問題」という側面からみれば、領有化に反対する立場の表明である。

またペイジはインドへ行くことを一攫千金と結び付けていないが、舞台となったこの時代の直後から、インドへ行くことは蓄財を意味するようになる。その過程で「ネイボッブ」をめぐる言説が生まれたが、インドで官僚として勤めることがステータスをもつようになると、それ以前のペイジのような絶

望感は理解できなくなるようだ。実際1827年、ウォルター・スコットは『外科医の娘』の中で、登場人物のインド行きについて次のような記述を加えている。

> ..., at that time, the East India service presented no charms to that superior class of people who have since struggled for admittance under its banners. [8]

したがって、18世紀終わり以後になると、イギリスの若者がインドへ行くことは実際の苦労はともかく、記号としては18世紀半ば以前とはまったく異なったものになった。1750年代であれば、ペイジは不運を象徴し、帰国できない運命に描かれて当然だったが、19世紀になれば、1780年代を舞台にした『外科医の娘』の男性主人公は財産を築くという明白な目的を持ってインドに行き、彼がインドで死ぬ代わりに、女性主人公が財産を得て帰国するように、何らかの形で富の移動が不自然ではなくなった。

6．インドのクライブ

しかし、このような立場とは関係なく現地では、事態が進行していたのであって、テキスト中で兵士としてのペイジが加わる戦争は、後にインドの植民地化を確実にしていくものと評価されるものである。「フランス宮廷の野心と陰謀がアメリカ大陸だけではなく、東インドまで広がった（p. 196)」ことから起こる抗争は、第二次カーナティック戦争（1750－54）と考えられる。マドラス西方のアールコット Arcot のナワーブ Nabob [9] 位をめぐる対立と、アールコットの包囲とイギリス側の勝利の記述は事実に取材したものと考えてよいのではないだろうか。この戦争が4年にわたることも、一連の戦争の終結後にテキストが書かれたとみなす根拠となろう。史実に即すならば、この戦いを指揮した「若い指揮官」はロバート・クライブであろう。しかし、この人物にはそのような事実を連想させるような適当な名前は与えられていない。戦争の後、ペイジは帰国する夢を抱くのだが、例によってヴァンプの妨害でインドにとどまることになる。そのために、次のカルカッタを巡るナワーブとの戦いにもペイジはトラスティと共に参加する。

> As the English determined to retaliate on their foes the injuries they had so lately sustained from them, Calcutta was invested by a gallant

officer, who carried on the attack with such vigour and intrepidity, as contributed to the sudden reduction of that settlement,... (pp. 233 −234)

この戦争の相手がベンガル太守であることのこの後の記述でわかるのだが、1756年のカルカッタのイギリス商館襲撃にもとづくとするなら、この「勇敢な将校」もロバート・クライブということになる。やはり名前がつけられていないということはかえってそのことを示しているように思われる。あまりにも明らかな人物であるために寓意的な命名を避けたのではないか。

この可能性を逆転するならば、他の人物は、ただちに読者に認知されるほどではなくとも、事情に詳しい読者であれば理解できるような人物をモデルとしていても不思議ではない。特に、ペイジとはさほど関係ないにも関わらず詳しい記述がある人物は特定の読者に対するメッセージであったかもしれない。単に資格のない医師や無能な船長を批判するということではなく、現実に風刺された人物が存在したと考えれば、脱線したような記述の不自然さを納得できる。それが実在した誰なのかを言及することはここではできないが、そのような仮定は有効だろう。

実際に、個々の人物像は名前が示すとおりの表面的なキャラクターであっても、テキストは東インド会社に代表されるような制度への批判やインドのイギリスの関係をめぐる政治的な立場表明を含んでいる。さらに明確に言及されているわけではないが、ヴァンプに代表されるような身分制度の撹乱や、インド在住の会社員たちの権勢争いの言及は、1770年代に見られるネイボッブ[10]Nabob 批判を先取りするものを孕んでいる[11]。だからこそネイボッブの代表となるクライヴであるはずの人物に名前が与えられないことが意味深く思われるのである。テキストに有力な人物への風刺的な意味もあるとすれば、出版年次はテキストが予言的なものであるというよりも、意図的なずれと理解できないだろうか。フランスやベンガル太守との戦いの結果についてのあいまいな評価は、それがどのような変化をもたらすかを想像し得ていないことを示す。このテキストは、18世紀後半に入った時代の東インド会社およびインドへのイギリス本国における政治的立場の混乱を表明したものと言える。

テキスト

Anonymous, *The Adventure of a Kidnapped Orphan*, Garland Publishing, Inc. (New York & London), 1974.

1　第一次・第二次カーナティック戦争といわゆるプラッシーの戦い。フランスとイギリスの対立や現地勢力との関係から起こった戦争が結果的にイギリス東インド会社がベンガルやカーナティック地域での勢力確立に結びついた。

2　Hannnah aitken, Ruth Michaelis-Jena (ed.), Schotiische Volksmärchen, 1965, Düsseldörf／Koln, pp.275－278.
小沢俊夫編『世界の昔話　イギリス』(関楠生　訳)、ぎょうせい、pp.153－157.

3　R. B. シュウォーツ、『18世紀ロンドンの日常生活』(玉井東助、江藤秀一訳、研究社出版、1990.) によれば、18世紀半ばのロンドンでは、「テムズ川に浮かぶ船に事情に疎い外国人などを誘い入れ、水兵として海軍に引き渡す」商売が行われていた (p.155)。

4　本テキストではJoannaだが、FryerやDampierのテキストではJohannaもしくはJohannnah。現在のコモロ諸島のアンジュアン島。

5　テキストのイントロダクションでは主人公のファースト・ネームはThomasである。本文中ではほとんどこの名は登場しないが、ここでJohnであることはこの宣言を無効にする意図を示すものと取ることもできる。

6　この文書の日付は1750年1月10日となっている。

7　浅田實『イギリス東インド会社とインド成金』ミネルヴァ書房、2001年、pp.181－182.

8　Scott, Walter, *The Surgeon's Daughter*, 1827 (1894), London, p.54.

9　ムガール支配下の地方領主を指す現在の通常のつづりはNawabであるが、テキスト中に使用されるNabobを用いる。

10　注8のNawabと同語であるが、「インド帰りの成金」を意味する場合はネイボッブと表記することにする。

11　浅田、2001.